

1 学校運営の評価

コロナ禍の中での教育活動であることを念頭に置き、感染症対策の徹底から身に付けた新しい学校生活様式の定着をもって推進させることができた。併せて、情勢や感染者数等の数値に惑わされない教職員の業務遂行力は、常に先を見据えた学校の現状の正確な把握へと導き、校長方針の大きな原動力となった。学校生活満足度82.3%

(1) 成果となった実績

- ア 統合型支援システムやC4th導入に伴う事故ゼロ
- イ 適切な組織連携による情報共有化を実現、組織体制変更後（教員死去）の混乱回避
- ウ 若手及び中堅教員専門性向上研修を活用した研究授業 計10回以上実施
- エ 学校見学・説明会 全8回実施 参加者 延べ2352名(オンラインでの参加含む)
 - 推薦に基づく選抜 倍率 一般3.26倍 特別スポーツ3.04倍
 - 学力に基づく選抜 倍率 男子1.66倍 女子1.33倍
- オ ペーパーレスの取組として、オンラインでの職員会議を2回実施

(2) 課題となった問題点

- ア 統合型支援システムやC4th導入に伴う教務部内業務の負担増
- イ 教員欠員後も補充できない教科・分掌への支援体制
- ウ 1～3年次及び中堅教員の各研修制度を活用した研究協議会の形骸化
- エ 受検生のニーズに応える授業や部活動の体験型説明会の検討
- オ 生産性向上と業務軽減を目的とした校内ネットワーク環境の強化

2 学習指導の評価

観点別評価の円滑導入に向け、教科主任会議を計画的に実施するとともに、成績会議等においても、各教科の疑問点や課題を共有し、共有理解を図った。授業満足度71.3%

(1) 成果となった実績

- ア 朝のホームルームでは、集中力を高める学びの時間を確保し、学習意欲を向上させた。
- イ 各定期考査や小テストの結果から生徒の習熟度を適切に把握し、学習グループを適宜再編成することで基礎学力と学習意欲を効果的に高めた。
- ウ 観点別評価の導入に伴い、全教科・授業での生徒の主体性を引き出すアクティビティな授業を定着させることで生徒の日々の学びを評価できる体制づくりに努力した。
- エ 各教科（公民、家庭、総合的な探究の時間、人間と社会）及び各学年団（特別活動等）と連携し、主権者及び消費者としての意識の醸成を図った。
- オ 探求委員会が基幹となり、大学との連携による「総合的な探究の時間」を実現した。

(2) 課題となった問題点

- ア 学校生活への不適應から学びの意義が見出せずに、通信制課程へ転向する生徒が増加
- イ 全ての教科において、購入パソコンを有効活用させる授業力の獲得
- ウ 校長主導による特進クラスの経営方針及び土曜講習の在り方の検討
- エ 教科「公共」の円滑導入に向けた他教科との連携方法
- オ 生徒の探求活動を支援する教員向け研修会の実施と探求モデルの開発

3 生活指導の評価

コロナ禍による生徒の心的不安定への支援を管理職と生活指導部主任、及び学年主任とが困難さを共有し、ぶれない一貫した対応で安心・安全な学校生活を維持した。生徒間同士の大きなトラブルもなく、学ぶ者と教える者との信頼を基盤にした良好な人間関係を構築した。

ただし、複雑な家庭環境が要因となり、保護者との確執からネグレクトへと発展する現状があるため、継続的な寄り添いが必要と判断する。生活指導満足度 87.1%

(1) 成果となった実績

- ア 挨拶運動、各行事における感染症対策、校内掲示用の SNS 不適切使用の注意喚起ポスターなど、生徒会が主体的に取り組み、暴力・いじめ等の発生を抑えた。
- イ 主任養護教諭のリーダーシップによる教育相談体制は、親子関係等の悪化から生じる生徒の生活課題解決に向けて大きな原動力となった。
- ウ 管理職、学年、養護教諭との連携を強化し、各学校行事前 PCR 検査（抗原検査含む）を確実に実施することで安心・安全な学校運営の基盤と保護者への信頼を確保した。
- エ 情勢を鑑みての校内規則改定は、教職員及び生徒との共通理解を図ることで、大きなトラブル等もなく、安心・安全な学校生活を維持できた。
- オ 生活指導部主任の強いリーダーシップを基盤に、各行事担当者の冷静な判断で、体育祭、文化祭、強歩遠足の 3 大行事における斬新かつ趣向を凝らしての取組を実現させた。

(2) 課題となった問題点

- ア ブラック校則や人権侵害といったマスコミからの情報が氾濫する中、これまで学校が努力してきた生活指導上の課題解決の経緯についての理解啓発
- イ 保護者からの過剰な苦情や不当な要求と併せて、ネグレクト、無関心、過干渉などの保護者養育力への教員対応力の向上
- ウ コロナ対応として、国や東京都の方針や意向に左右されることのない、本校の現状に適した正確な判断とする学年団と管理職の連携強化
- エ 入学後も生活指導について理解不足でいる保護者の現状を踏まえ、指導方針を本校の特色として価値付けられるように入事前の説明内容の充実を図る。
- オ 長引くマスク生活により、素顔を見られることに抵抗がある生徒の急増から屋外での学校行事における適切な声掛け指導の充実

4 進路指導の評価

進学・就職問わず、進路実現に向けての計画的な支援を基盤に、生徒の可能性を引き出す対応を継続させた。特に、共通テスト受験で大学進学を目指す生徒へは、大学入試改革の経緯や背景などについて進路便りを通して適切に理解促進を図った。進路指導満足度 83.5%

(1) 成果となった実績

- ア 特進クラスの生徒の学習意欲を学年全体の学力向上へと寄与させ、一般受験大学進学を目指す確かな学力を身に付けられるように学年団との連携を図った。実績は以下のとおりである。 四年制大学進学率 70% 短大進学率 2% 進路決定率 92%
共通テスト受験者 143名 日東駒専合格者 31名 GMARCH合格者 7名
- イ 進路便り「一意専心」を 12 回発行し、生徒の進学意識を着実に高めた。
- ウ 生徒が自己の弱みに向き合う貴重な資料とするため、学年との連携を図り、模擬試験を 1・2 学年 5 回、3 学年 8 回実施した。
- エ 桜美林大学等と連携し、情報が氾濫する現代社会においても自己の興味・関心を追求することの大切さについて理解を深め、探求活動の充実を図った。
- オ 感染症対策の観点から通学による勉強マラソンへ変更した勉強合宿は、2 日間に渡り 15 時間の学習時間に達し、学びに向き合う習慣を定着させた。

(2) 課題となった問題点

- ア 「子どもの権利条約」等の観点から、進路規定についての継続的な見直しや検討
- イ 特進クラス経営について、学校長方針と生徒育成像の明確化
- ウ 一人一台端末導入に伴う、進路の行事や学習における活用機会の更なる確保
- エ C4th 導入による調査書作成について学年との連携強化
- オ コロナ禍における勉強合宿再開についての検討と会場の確保

5 特別活動の評価

新しい日常生活が定着する中、生活指導部と学年団が連携して学校生活における生徒のモチベーション維持に努めた。特に、部活動や委員会活動、学校行事に向けての準備等、仲間との協同で充実させる放課後ライフの推進は、コロナ禍における学校全体の帰属意識の醸成に大きく寄与した。また、修学旅行や校外学習、地域ボランティア活動等も、実施に向けての努力が実り、無事に実現できたことは大きな成果である。

(1) 成果となった実績

- ア 感染症対策の徹底により部活動等の集団感染がなかった。
- イ 一人一役の役割で臨ませた学校行事への取組は、クラスの団結心を強めたことで人間関係を要因とした生徒間トラブルや長期欠席生徒等はいなかった。
- ウ コロナ禍での学校生活を明るくする取組として、生徒会主体でのマスクデザインコンテストを実施し、校内閉塞感を払しょくさせた。
- エ 地域の保育園との連携による体験型防災訓練を実施し、各生徒へは、幼児を保護・見守り等の役割を任せることで高校生の地域貢献についての意識を効果的に高めた。
- オ 感染対策ガイドラインを遵守する中、練習時間の確保や校外での練習や演奏を積極的に勧めるなど最大限の支援を保証したことで各部活動が輝かしい功績を残した。
特に、東京都で初の開催となった全国高等学校総合文化祭に箏曲部が選出され、堂々たる演奏を披露した。部活動加入率84%

(2) 課題となった問題点

- ア コロナ禍収束なしと想定する中、これまで以上の最大限の部活動支援方法の検討
- イ 感染対策の定着を基盤に、宿泊を伴う部活動（合宿）の実現に向けた準備体制の確保
- ウ 行事を精選することを踏まえ、慣例や前例からの脱却を図る新しい取組とその方向性
- エ オンライン学習デーの円滑実施に向けた各教科、各学年、各分掌との連携強化
- オ 110周年記念式典開催に向けての機能的な委員会の実現

6 その他の評価

コロナ禍での教育活動3年目となったが、前例や慣例に左右されない教職員の力強い実践的責任感に支えられ、校長としての経営責任を果たすことができた。特に、学校の現状を正確に把握しての生徒ファーストの取組は、生徒、教職員、管理職が三位一体となってこの窮地を乗り越えることができたと確信する。

(1) 成果となった実績

- ア 時差通学を徹底した感染症対策、及び教職員の健康管理体制、各行事におけるPCR検査の実施など、円滑な学校運営は、集団感染のない安心・安全の学校を確保した。
- イ 子育てや大学受験等をテーマに「校長との座談会」を4回実施し、学校の現状や課題、教員の指導上の困難さ、保護者の不安・悩みを共有することで信頼を深めた。
- ウ 2020東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、部活動指導員13名、外部指導員8名を確保し、運動系、文化系を問わず果敢に挑戦することの大切さを啓蒙した。
- エ 育児、介護、健康を最優先とするための制度活用、及び計画的年休の取得など働き方を具体的に変えていくことで新たな時代に相応しい労働意識の醸成を図った。
- オ 視聴覚室、グラウンド、体育館の各照明のLED化、猛暑対策とする冷風機のレンタル、ICT機器等の適切な購入など、学校施設老朽化に伴う修繕や10年先を見据えたデジタル機器の増設を優先させるため、経営企画室との連携を適切に図った。

(2) 課題となった問題点

- ア 令和5年度4月以降、コロナ禍対策の遵守と緩和を適切に判断した校長方針
- イ 特別な支援を必要とする生徒やその家庭への対応についての共通理解
- ウ 閉塞感の打破を目的としたスマイルプロジェクト等の都教委施策の円滑実施
- エ 育児等制度活用後の講師を含めた後任補充者不足への対応

オ 経営企画室との連携強化による記念式典に向けての計画的な予算執行の実現